

寝具製造業

世界でも類を見ないふとん技術を守る

7-16 ふとんのコクボ

おらが街のふとん屋さん、日本一

ふとんのコクボは、愛知県の最南端・渥美半島伊良湖岬のすぐ側にある。そんな街のふとん屋さんであるが、実は店主の小久保新吾氏は1級寝具製作技能士であり、第25回技能グランプリ優勝者である。今、日本で一番の「街のふとん屋さん」である。

ふとんのコクボは、小久保氏の父親が戦後に開業した。小久保氏は同社の2代目であり、綿ふとんの製造、販売、打ち直しを行っている。小久保氏は、地元の高校を卒業後、東京蒲団技術学院（現在は廃校）でふとん技術を学び、その後練馬区のふとん屋での修行を経て、故郷の愛知県に戻ってきた。



ふとんのコクボ

ふとんを託してもらう信頼関係構築が重要な鍵

世界で綿のふとんを使っているのは、世界の人口のうち半分くらいであるという。欧米でも東欧の一部地域などで綿のふとんを使っており、あとはインドや中国、韓国などのアジアが多い。しかし、その中でも技術力の高い綿のふとん作りをしているのは日本くらいだと小久保氏は語っていた。とはいえ、最近は綿のふとんではなく、大量生産に向いているポリエステルや羽毛が多くなってきている。それでも綿ふとんは日本の気候にあっており、大切にすべき寝具であり技術であるという。

日本のふとん業界は、戦後できた業界である。戦前、綿のふとんは家で作り、直すものであった。その頃は、綿屋と呼ばれていて、打ち直しを主に行っていた。戦後、女性の社会進出とともに、ふとんを家で作ることも少なくなっていき、ふとん屋がふとんの製造・打ち直しを行うようになった。この時期に開業したふとん屋の1つがふとんのコクボである。

戦後、ふとん技術の基礎教育の制度を確立したのは東京蒲団技術学院の中村畦硯学院長であった。東京蒲団技術学院は中村氏が設立した学校であり、小久保氏が学ん

だ時期には毎年全国から約100人の学生が集まり、寝具製作技術を学んでいたという。

小久保氏によると、東京蒲団技術学院は「ふとん作りは人作り」という考えのもと、ふとん作りだけでなく、商売のこと、更には清掃活動も行うなど人間形成に力をいれていたという。この理由を小久保氏は、「ふとんは中身が大事であるものの、その大切な中身が外から見えない。そのため、なかなか良さを伝えることができないので、『この人なら自分のふとんを任せられる。』と信用してもらうことが大切な商売でもあるんです。」と教えてくれた。

お客さんのふとんが自分の技能を教えてくれる

「ふとんわた自身は形がない。やわらかいものを形作っていく過程が面白い。」と小久保氏はふとん作りの面白さをこう表現した。

「3年間の修行の後、地元に戻ったときに自分は結構ふとん仕立てはうまいと思っていたんです。でも、地元に戻った直後のお客さんに仕立てたふとんが数年後、再び戻ってきたときに、自分の技術の足りないところが分かる。まさしく、お客さんのふとんが自分の腕を教えてくれるんです。」とふとん技術の奥深さを教えてくれた。



普段の業務の様子(小久保氏)

ふとんのコクボ

- ▶業種: 寝具製造業
- ▶住所: 愛知県田原市
- ▶代表者: 小久保新吾

- ▶設立: 昭和30年
- ▶従業員: 4名
- ▶技能士数: 1名

40歳の節目に、技能グランプリへ挑戦を決意

若い頃の小久保氏は、愛知県寝具技能士会に入っていたものの、青年会議所（JC）や地元の活動などに忙しくしていた。転機が訪れたのは40歳のとき。40歳で引退するJCの活動も一息つき、技能士会にはじめて参加した。その時に薦められたのが技能グランプリであったという。技能グランプリに出るために、1級寝具製作技能士であることが必要な条件であり、技能検定を受検した。

技能グランプリの結果は、初出場時の第24回技能グランプリ（平成19年）では準優勝と悔しい思いをしたが、今回の第25回大会（平成21年）で見事リベンジをして、念願の優勝を果たした。



小久保氏



技能グランプリ

あるが、彼の人柄に触れるとふとんを作って欲しくなってしまう。技能教育とともに人間教育の重要性を改めて感じた。



技能グランプリの作品

今後は、ふとん業界への恩返しを

小久保氏の今後については、「愛知県寝具技能士会の一員として、講習会での講師や検査員を務め、技能伝承に協力していきたい」と考えているという。

「これまでお世話になってきた技能士会の会長さんは、他県の技能士の方にも講習の機会を提供するなど、技能の伝承に非常に熱心であり、人柄も素晴らしい。また、学院で学んだ中村氏のような方たちの後継者となれるようにがんばっていきたい。」と語る。その謙虚な姿勢を常に崩さないその姿からは、今後のふとん業界を支える人材という自負が感じられた。

また一方で、「人生のうち3分の1はふとんの中になるので、もう少しふとんを大切に考えて欲しいと思っているんですけどね。」と最近の綿ふとん離れには少し寂しそうな様子であった。

ふとん自体は確実に必要なものであるが、綿ふとんの需要は以前よりも少なくなっている。その中で小久保氏は、街のふとん屋として地域とともに生きることによって信頼関係を構築している。小久保氏のブログをのぞいてみると、地域のイベントについての記載も盛りだくさんだ。

地域との信頼関係を維持しながら、全国で有数の技能レベルを維持、向上させていく。非常に難しいことでは